

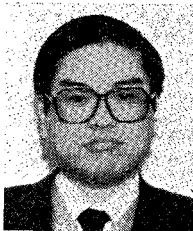
できる情報を最大限に利用し、考え、工夫し、判断していく態度が要求される。したがって、土木の仕事の一つやりおえれば、新たな知見を吸収したという充足感とともに常に基本原理に立ちかえり、思慮深く考え計画する人間へと成長していくことになる。土木技術者は、多かれ少なかれこのような態度を身につけており、世に誇れる「武器」となっている。

世の中が複雑になってくると、土木、建築、機械、電気などという専門分野別に仕事をするよりは、学際的な仕事、他分野と共同して実施するプロジェクト的な仕事で活躍する機会が増えてくる。土木技術者には、その名称からは想像もできないような内容の仕事に従事し、活躍している人が意外に多く私の周囲には居る。このような現象は、低成長時代に伴う建設部門の仕事量の減少も一因かもしれないが、それ以外の何かがあると私は考えている。それは、土木技術者が自然を相手にして身につけてきた「土木技術者の武器」を世の中が囑望していること、すなわち、そのような武器を身に付けた技術者でないと学際的な仕事やプロジェクト的な仕事を成功させることが難しくなっているためではなからうか。今後、この種の仕事がますます多くなっていくであろう。若い土木技術者が、じっくり自然を相手に仕事をする機会が最近少なくなっていることを考えると、数少ない機会を有効に捕えて、先輩が培った武器を確実に身に付けていくことを若い人達に望みたい。

(筆者・Tetsu SIOMI, 正会員 工博(財)電力中央研究所
耐震構造部原子力構造研究室長)

「エビ穴」と土木技術者

武山 正人



四国には、自然の美しさを残した河川が多い。最近、NHKで紹介された四万十川はその代表である。このような川の一つに黒川がある。仁淀川の小さな支川の一つである。この川には、四国では最も古い水力発電所を含む5つの発電所がある。文明開化の灯をともした発電所は、自然と調和し黒川の自然美の中にとけこんでいる。

この川の流れる小さな山間の村では、これらの水力発電所建設の歴史が、そのまま村発展の歴史につながって

いる。明治の末、発電所の建設を知らされた村人は驚いた。「水から火を出す工事をするのじゃげな」「どげするのじゃろねや」。こう言う会話が聞かれるなか、建設工事は着々と進んでいった。この時代の記録をひもとくと、われわれの先輩の話がでてくる。村人との間を良く取り持った話、地域開発に心を注いだ話、また、村人が彼らを良く敬慕したことなども伝えられている。彼らがCivil Engineerとして能力を十分に発揮させたことが窺い知られる。

われわれの仕事は、技術的な範囲のみにとどまらず、人間的な関係、特に地域社会の人達との係り合いも少なくない。土木技術の究極目的ともいえる社会資本の充実からしても、当然のことかもしれない。土木技術が真のCivil Engineeringとしての結果を得るに、避けておれない一面であろう。

人間誰しも、過ぎ去った過去を旧き良き時代と慕うものである。大規模な開発、自然変革に対し、その効果などは個人の目には映らない。変化が郷愁となって映る。この時、われわれはあせってはならないと思う。

エビは、川辺の石垣の穴でじっと耐えて冬をすごし、身体が大きくなるのを待つという。成長に見合った大きさの穴を選ぶともいう。世の中には、紆余曲折があるうし、土木技術者としても時代の流れに左右される変化もあるう。これら乗り越えるためには、「エビ穴」の精神を持つこととしよう。

われわれが今考えなければならないことは、性急さではなく忍耐と確実な前進である。

(筆者・Masato TAKEYAMA, 正会員 四国電力(株)
建設技術部 副長)

カラマツ並木の下を掘る

藤田 干城



札幌市の東に広がる丘陵地帯に、羊ヶ丘と呼ばれる広大な農場、農林水産省の北海道農業試験場がある。小高い位置には展望台があり、フロンティアスピリットの象徴ともいえるW.S. クラーク博士の立像が立ち、観光のポイントともなっている。この農場内にあるカラマツの並木は800mに連なり、春の新緑、晩秋の黄金色と四季それぞれ